

証券アナリスト 講義録		科目 証券分析	コース 1次対策 横断セミナー	回数 1
-------------	--	------------	-----------------------	---------

配布物	★ミニテスト：あり [] なし ★実力テスト：あり [] なし ◇配布物なし	★答 練：問題用紙・解答用紙・解答解説 ★その他のレジュメ []	講師 山岡 先生
-----	--	--------------------------------------	-------------

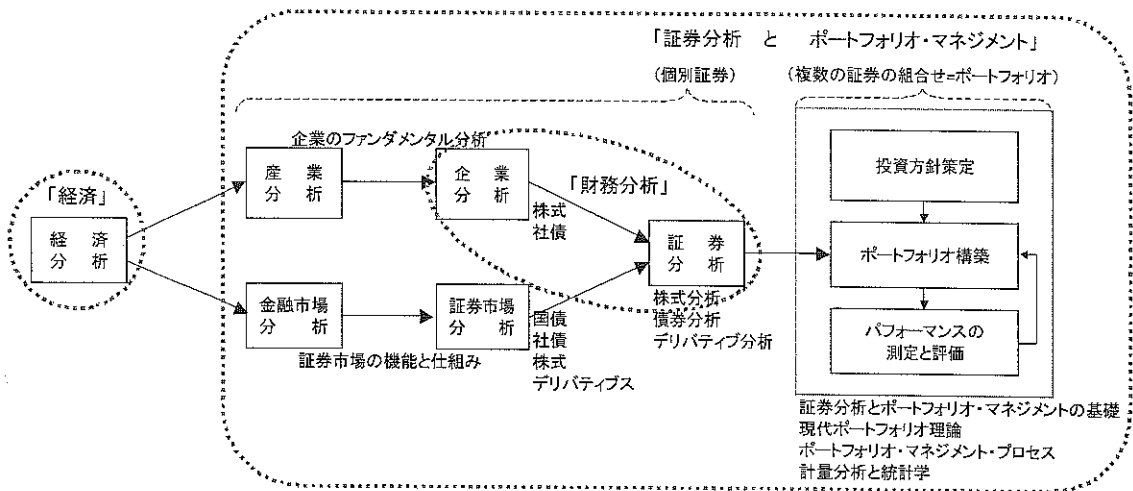
テキスト ページ	黒 板 内 容
	①日本の証券市場 国 ——— 債券(国債) ——— 利回り(金利) 企業 < 債券(社債) ——— 信用リスク = 株式 ——— ※派生資産 → ⑤デリバティブ ④債券分析 ②ファンダメンタル分析 ③株式分析 ↓ 複数の資産の組み合わせ → ポートフォリオ (分散効果) ⑥ 証券分析とポートフォリオ・マネジメント 試験 180分 180点満点 (105問前後) 第1問 ----- 15問 (15点) 正誤問題 第2問～第6問 ①②～⑦ ↓ 制度、理論など 計算問題 正誤選択

証券アナリスト試験

1 次秋試験向け 3 科目横断実践セミナー

－ 証券分析とポートフォリオ・マネジメント －

● 企業調査、証券分析～ポートフォリオ構築まで：アナリスト試験の内容との関係



● 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの主な内容

(協会通信テキストの配本)

- 1 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎
(証券投資のリターンとリスク、リターンとリスクの計測、ポートフォリオ理論の基礎)
- 2 計量分析と統計学 (1)
(証券分析で使う数学、統計学の基礎、回帰分析とベータ)
- 3 現代ポートフォリオ理論
(投資家の選好、ポートフォリオ理論、CAPM、マルチファクター・モデルとAPT、リスクニュートラル・プライシング、市場の効率性)
- 4 証券市場の機能と仕組み
(証券の種類、証券市場の仕組み、証券発行市場、証券流通市場、証券市場のプレイヤー:証券会社と機関投資家)
- 5 企業ファンダメンタル分析 (産業分析と企業分析、主要な財務分析指標、主な企業分析手法)
- 6 株式分析 (配当割引モデル、株式価値算定の3つの等価アプローチ)
- 7 債券分析 (債券のキャッシュフローとその評価、様々な利回り概念、金利の期間構造、債券投資のリスク、信用リスクと格付け)
- 8 デリバティブ分析 (デリバティブとは、デリバティブの仕組みと価格形成、わが国のデリバティブ市場、投資戦略への応用)
- 9 ポートフォリオ・マネジメント・プロセス
(ポートフォリオ・マネジメント・プロセスの概要、アセット・アロケーション、マネジャー・ストラクチャー、個別証券ポートフォリオ、パフォーマンス測定と評価)

● TAC秋演習コース・テキストと協会通信テキストとの対応関係

TAC 秋演習テキスト	協会通信テキスト
第1章：ポートフォリオ・マネジメント	1) 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎 2) 計量分析と統計学(1) 3) 現代ポートフォリオ理論 9) ポートフォリオ・マネジメント・プロセス
第2章：債券分析	7) 債券分析
第3章：ファンダメンタル分析	5) 企業のファンダメンタル分析
第4章：株式分析	6) 株式分析
第5章：デリバティブ分析	8) デリバティブ分析
第6章：証券市場の機能と仕組み	4) 証券市場の機能と仕組み

注 1) TAC 秋演習テキストは本試験過去問題の抜粋とその解答・解説です。

注 2) TAC 秋演習テキストの解説は TAC オリジナルです。

第1次レベル（2011 年度）スタディ・ガイドより抜粋

	試験時間	出題内容・範囲	出題形式 ^(注)
第1次試験 (科目別)	経済：90 分 財務：90 分 証券分析とポート フォリオ・マネジメ ント：180 分	- 証券分析業務に必要な基礎的な知識および分析力を問う。 - 原則として通信テキストから出題される。	- すべての正解が1つの客観問題(計算問題,穴埋め問題を含む選択肢問題)。 - 答案用紙にマークシートを使用。
第2次試験 (総合)	4 科目総合：420 分 (うち職業倫理・行為基準 60 分)	- 証券分析業務に必要なより高度の知識と実務への応用力および職業倫理の習得を問う。 - テキストの内容が必ずしもそのまま引用されるわけではない。	- 計算問題等も一部に出題されるが、大部分が記述式の応用問題。 - 正解は1つとは限らず、採点に際して解答に至る論旨展開が重視される。

(注) 各問題の冒頭には、問題ごとの配点 (=解答に要する時間の目安, 1分=1点) が示されており、その配点合計は試験時間 (分単位) と一致する。

● 出題傾向（平成 22 年秋）

※平成 23 年春については 2011/05/17 現在、不明です。

証券分析とポートフォリオ・マネジメント（大問 6 問，合計 105 問：180 点満点）180 分

問 題	分 野	内 容	理 論
第 1 問	日本の証券市場 (15 問：15 点)	証券市場の機能と仕組み	※制度など
第 2 問	企業のファンダメンタル分析 (17 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	財務分析
第 3 問	株式分析 (15 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値
第 4 問	債券分析 (19 問：35 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値
第 5 問	デリバティブ分析 (17 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値，無裁定
第 6 問	ポートフォリオ・マネジメント (20 問：40 点)	・証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎 ・現代ポートフォリオ理論 ・ポートフォリオ・マネジメント・プロセス	・(リスク)分散効果 ・投資家の選好 ・パフォーマンス評価

* 選択問題（四者ないし五者択一）

平成 21 年（春）～平成 22 年（秋）

問 題	分 野	平成 21 年 (春)	平成 21 年 (秋)	平成 22 年 (春)	平成 22 年 (秋)
第 1 問	日本の証券市場	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)
第 2 問	企業のファンダメンタル分析	17 問 (30 点)	18 問 (30 点)	17 問 (30 点)	18 問 (30 点)
第 3 問	株式分析	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)
第 4 問	債券分析	20 問 (35 点)	20 問 (35 点)	19 問 (35 点)	18 問 (35 点)
第 5 問	デリバティブ分析	17 問 (30 点)	15 問 (30 点)	17 問 (30 点)	19 問 (30 点)
第 6 問	ポートフォリオ・マネジメント	20 問 (40 点)	21 問 (40 点)	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)
合 計		104 問 (180 点)	104 問 (180 点)	103 問 (180 点)	105 問 (180 点)

- 全体で 105 問前後・180 点満点（180 分）
- 第 1 問は例年 15 問・15 点（各 1 点）
- 第 2 問～第 6 問は（Ⅰ）（Ⅱ）～（Ⅴ）といったセクションに分割

● 受験者数・合格者数・合格率

第1次試験（受験者数、合格者数とも3科目合計の延べ人数）

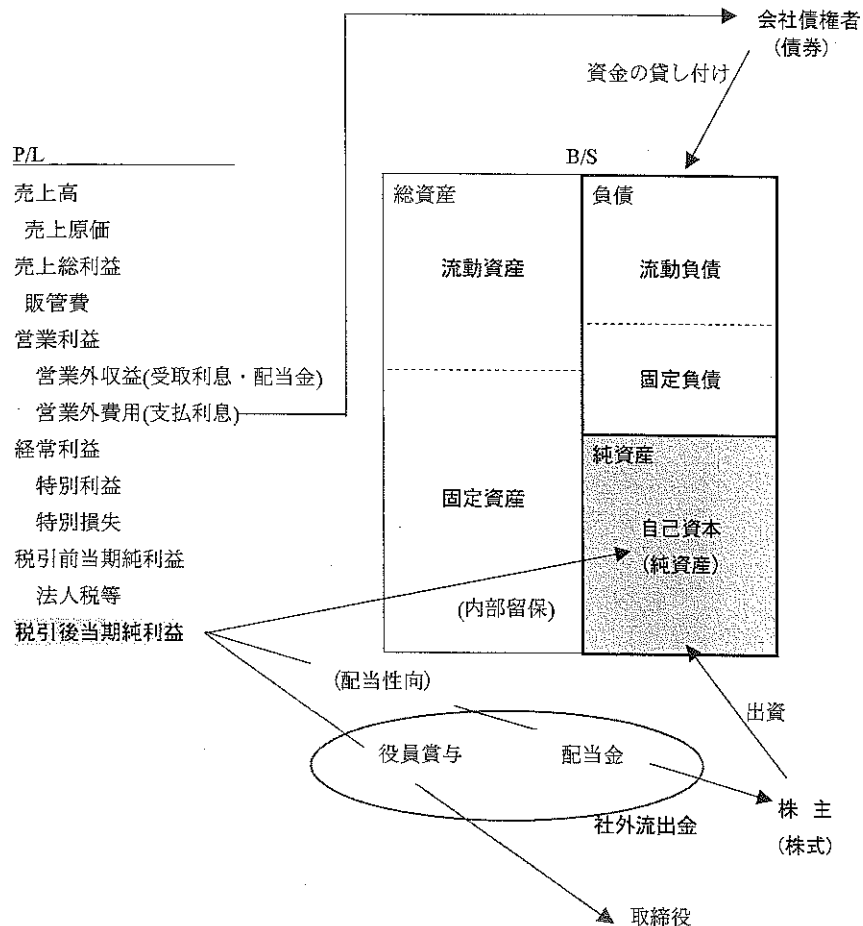
年	度	受験者数	合格者数	合格率
平成 18 年	春	10,459 名	5,024 名	48.0%
	秋	5,063 名	2,224 名	43.9%
平成 19 年	春	9,447 名	4,171 名	44.2%
	秋	5,600 名	2,509 名	44.8%
平成 20 年	春	9,494 名	4,425 名	46.6%
	秋	5,986 名	2,773 名	46.3%
平成 21 年	春	9,977 名	4,638 名	46.5%
	秋	6,815 名	3,361 名	49.3%
平成 22 年	春	8,924 名	4,173 名	46.8%
	秋	5,641 名	2,641 名	46.8%

出所：（公益社団法人）日本証券アナリスト協会ホームページ

第2問：企業のファンダメンタル分析

第3問：株式分析

※) このあたりは「財務分析」と密接です



● 企業のファンダメンタル分析

収益性の分析

財務安全性の分析

キャッシュフロー分析

● 株式分析

株価指標

1株当たり当期純利益 (EPS) ⇔ 株価収益率 (PER)

1株当たり純資産 (BPS) ⇔ 株価純資産倍率 (PBR)

株式価値評価 (現在価値)

配当割引モデル, 残余利益モデル, キャッシュフロー割引モデル

第6問：証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎（現代ポートフォリオ理論）

基本統計量

(1)リターン	(2)リスク
①期待値(期待収益率)： $E[R]$	②分散： $\sigma^2, \text{var}(R)$
	③標準偏差： σ
	(3)2証券の関係
	④共分散： $\text{Cov}_{X,Y}, \sigma_{X,Y}$
	⑤相関係数： $\rho_{X,Y}$

(1) リターン

投資収益率 (R)

$$R_x = \frac{\text{キャピタル・ゲイン} + \text{インカム・ゲイン}}{\text{購入価格}} = \frac{(\text{売却価格} - \text{購入価格}) + \text{配当金}}{\text{購入価格}}$$

証券A

現在の株価	1年後	
	株価	配当金
1,000円	1,040円	20円

$$R_A = \frac{(1,040 - 1,000) + 20}{1,000} = \frac{1,060 - 1,000}{1,000} = 0.06 = 6\%$$

① 期待値

証券A（買おうか？）

今後1年間の景気見通しについて...

景気の状態	確率 (P)	各状況における投資収益率
好 況	30%	+15%
普 通	50%	+6%
不 況	20%	-15%
合 計	100%	???

$$\begin{aligned} ??? &= 0.3 \times (+15\%) + 0.5 \times (+6\%) + 0.2 \times (-15\%) \\ &= +4.5\% \\ &= E[R_A] \end{aligned}$$

証券Aの収益率の期待値（期待収益率）

期待値 $E[R_X]$: Expected Value

$$E[R_X] = \sum P_i R_{X,i}$$

このケースでは...

$$\begin{aligned} E[R_X] &= (P_{\text{好況}} \times R_{X,\text{好況}}) + (P_{\text{普通}} \times R_{X,\text{普通}}) + (P_{\text{不況}} \times R_{X,\text{不況}}) \\ &= (\text{各状況の起きる確率} \times \text{各状況における投資収益率}) \text{の合計} \end{aligned}$$

※ 「期待値」という用語は平均値とほぼ同義に用いられますが、データの平均は期待値と呼びません。

- 証券 A に加えて証券 B への投資を考えます。

景気の状態	確率 (P)	各状況における投資収益率	
		証券 A	証券 B
好 況	30%	+15%	-40%
普 通	50%	+6%	+20%
不 況	20%	-15%	+80%
合 計	100%	+4.5%	$E[R_B]$

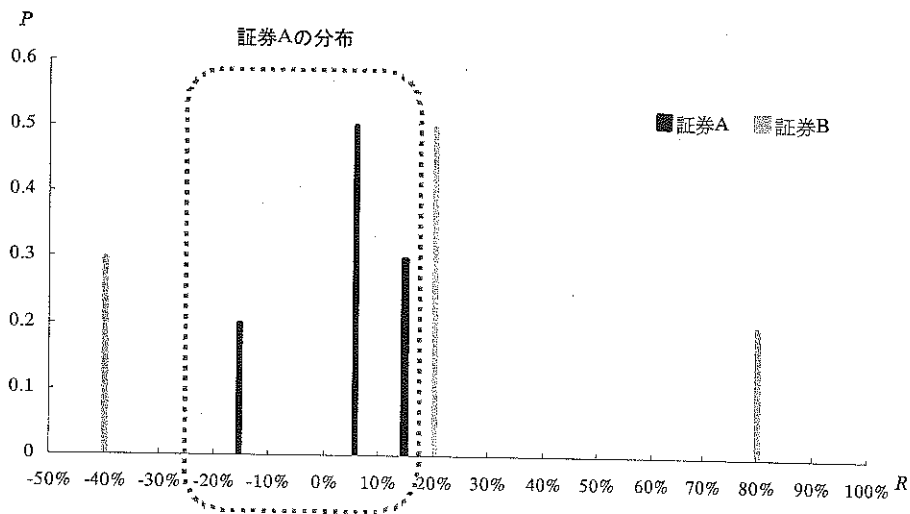
$$E[R_B] = 0.3 \times (-40\%) + 0.5 \times (+20\%) + 0.2 \times (+80\%)$$

$$= +14\%$$

とりあえず、リターン(期待収益率)は証券 A よりも高いのですが...

(2) リスク

- 確率分布



証券Aと証券Bを比較してみると、グラフからは証券Bの方が分布のばらつきは大きそうな「感じ」がします。

② 分散(期待値からのばらつき)

景気の状態	確率 (P)	証券 A	証券 B
好 況	30%	$0.3 \times (+0.15 - 0.045)^2$	$0.3 \times (-0.40 - 0.14)^2$
普 通	50%	$0.5 \times (+0.06 - 0.045)^2$	$0.5 \times (+0.20 - 0.14)^2$
不 況	20%	$0.2 \times (-0.15 - 0.045)^2$	$0.2 \times (+0.80 - 0.14)^2$
合 計	100%	=0.011025	=0.1764

$$\begin{aligned} \text{証券 A の分散 } \sigma_A^2 &= 0.3 \times (+0.15 - E[R_A])^2 + 0.5 \times (+0.06 - E[R_A])^2 + 0.2 \times (-0.15 - E[R_A])^2 \\ &= 0.3 \times (+0.15 - 0.045)^2 + 0.5 \times (+0.06 - 0.045)^2 + 0.2 \times (-0.15 - 0.045)^2 \\ &= 0.011025 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{証券 B の分散 } \sigma_B^2 &= 0.3 \times (-0.40 - E[R_B])^2 + 0.5 \times (+0.20 - E[R_B])^2 + 0.2 \times (+0.80 - E[R_B])^2 \\ &= 0.3 \times (-0.40 - 0.14)^2 + 0.5 \times (+0.20 - 0.14)^2 + 0.2 \times (+0.80 - 0.14)^2 \\ &= 0.1764 \end{aligned}$$

分散 σ_X^2 , $var(R_X)$: variance

$$\begin{aligned} \sigma_X^2 &= \sum P_i (R_{X,i} - E[R_X])^2 \\ &= E[(R_{X,i} - E[R_X])^2] \end{aligned}$$

このケースでは..

$$\begin{aligned} \sigma_X^2 &= P_{\text{好況}} \times (R_{X,\text{好況}} - E[R_X])^2 + P_{\text{普通}} \times (R_{X,\text{普通}} - E[R_X])^2 + P_{\text{不況}} \times (R_{X,\text{不況}} - E[R_X])^2 \\ &= \left[\text{各状況の起きる確率} \times \underbrace{(\text{各状況における投資収益率} - \text{期待収益率})^2}_{\text{偏 差}} \right] \text{の合計} \end{aligned}$$

③ 標準偏差

ばらつき具合を表す統計量として分散の平方根をとったものを確率変数 x の標準偏差 (standard deviation) といい、 σ_x などで表します。

$$\begin{aligned}\text{証券 A の標準偏差} \quad \sigma_A &= \sqrt{0.011025} \\ &= 0.105 \\ &= 10.5\%\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\text{証券 B の標準偏差} \quad \sigma_B &= \sqrt{0.1764} \\ &= 0.42 \\ &= 42\%\end{aligned}$$

標準偏差 σ_x : standard deviation

$$\sigma_x = \sqrt{\text{var}(R_x)}$$

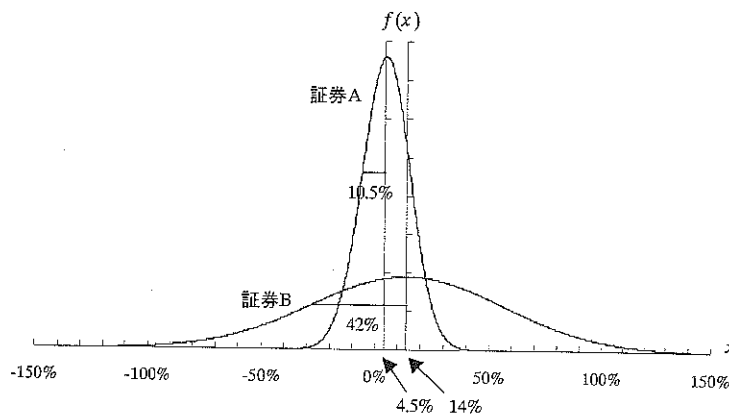
一般的に、ポートフォリオ理論で「リスク」と言った場合、この収益率の標準偏差を指します。

以上のことから、リターン（期待収益率）は証券 A よりも証券 B の方が高いのですが、同時に、リスク（収益率の標準偏差）も証券 A よりも証券 B の方が高いことがわかります。つまり、証券 A と証券 B を比べてみると、証券 A はローリスク・ローリターン、証券 B はハイリスク・ハイリターンということがわかります。

● 正規分布

証券 A と証券 B の収益率が正規分布に従うと仮定すると以下ようになります。

	期待収益率	標準偏差
証券 A	4.5%	10.5%
証券 B	14.0%	42.0%

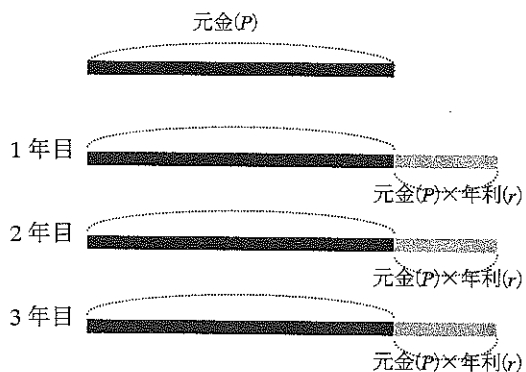


第4問：債券分析

■ 投資の基礎概念

1. 単利と複利

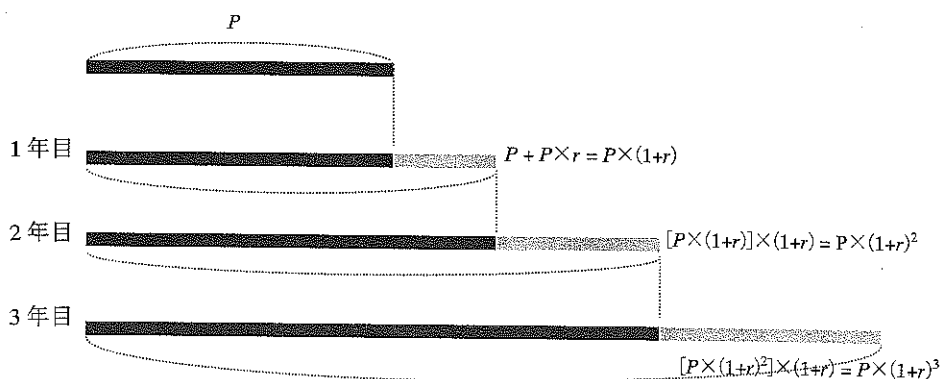
(1) 単利:元金（元本）のみが生む利息 → 利息に対する利息（再投資収益）を考慮しない



$$3 \text{ 年目の元利合計} : P + 3 \times (P \times r) = P \times (1 + 3r)$$

$$n \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + nr)$$

(2) 複利:利息を元金(元本)に加えて次の期間の利息を計算 → 再投資収益を考慮する

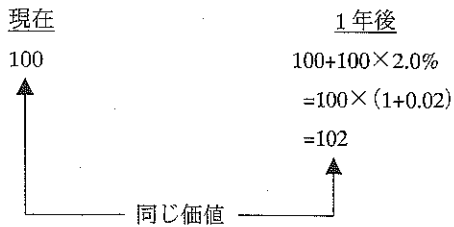


$$3 \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + r)^3$$

$$n \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + r)^n$$

2. 現在価値 (PV; Present Value) と将来価値 (FV; Future Value)

現在:100 円 (B/K 利子率 r :年 2.0%)



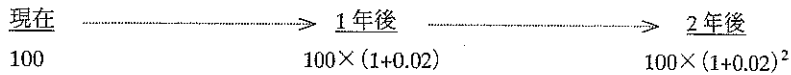
(PV) → (FV)

現在価値 $PV \times (1 + \text{利子率}) = 1\text{年後の将来価値 } FV_1$

$$PV \times (1 + r) = FV_1$$

$$\Rightarrow PV = \frac{FV_1}{1 + r}$$

2 年に拡張



$$PV \times (1 + r)^2 = FV_2$$

$$\Rightarrow PV = \frac{FV_2}{(1 + r)^2}$$

n 年に一般化

$$PV = \frac{FV_n}{(1 + r)^n}$$

$$= \frac{1}{(1 + r)^n} \times FV_n$$

Discount Factor (割引係数)

PV : 現在価値, FV_n : n 年後の将来価値, r : 割引率

3. 内部収益率 (IRR; Internal Rate of Return)

- ・ 今, 10,000 円投資すると 2 年後に元利合計で 10,404 円戻ってくる
- ・ この投資案件の 1 年当たりの平均投資収益率は...

$$10,000 = \frac{10,404}{(1 + r)^2} \quad (1 + r)^2 = \frac{10,404}{10,000}$$

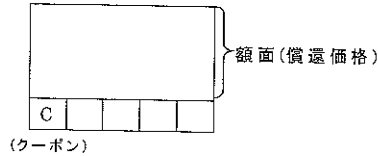
$$r = \sqrt{\frac{10,404}{10,000}} - 1$$

$$= 0.02$$

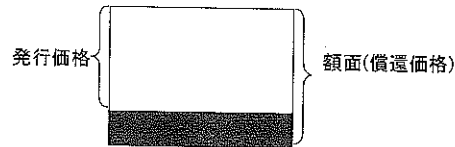
■ 債券

(1) 債券の種類

利付債（クーポン債）：発行後に定期的にクーポン（利金）の支払いがある。



割引債（ゼロクーポン債）：額面（償還価格）よりも低い価格に割引いて発行される。



(2) 利回りの計算

利率：クーポン・レート（額面に対する利金の割合）

例) 額面:100 円
年利率:5% ⇒ 年 5 円のクーポン

利回り:1 年当たりの平均投資収益率（*同じレートで再投資可能と仮定）

- 債券の収益（3つ）： ①利息収入（クーポン収入）
②クーポンの再投資収益
③償還差益

●複利最終利回り（ytm；yield to maturity）

- ・クーポンの再投資収益を考慮する（同じレート r で再投資）← *実はかなり無理な仮定
- ・満期(maturity)まで保有
⇒ 投資元本に対して年率何%の収益を生み出したか？

■ 債券価格と複利最終利回り（ytm；yield to maturity）

- ・利付債（年 1 回転化の複利計算 p.a.: per-annual）

$$P = \frac{C}{1+r} + \frac{C}{(1+r)^2} + \dots + \frac{C}{(1+r)^n} + \frac{F}{(1+r)^n}$$

$$= \sum_{t=1}^n \frac{C}{(1+r)^t} + \frac{F}{(1+r)^n}$$

- ・割引債

$$P = \frac{F}{(1+r)^n}$$

P :債券価格, C :クーポン額, F :償還価格, r :複利最終利回り, n :残存年数.

(ご参考) 2011 年春試験対策 TAC 公開模試より

第4問 (35点)

I 債券分析に関する次の文章を読み、以下の問1から問8の各問に対する答えとして最も適切なものをA～D (ないしE)の中から1つ選んで、答案用紙の該当箇所をマークしなさい。

問2 債券の利回りに関する次の記述のうち、正しくないものはどれですか。

- A 直接利回りは、インカム・ゲインだけを評価する利回りである。
- B パー債券では、クーポン・レートは複利最終利回りと等しくなるが、単利最終利回りとは等しくない。
- C クーポン・レートが最終利回りより高いとき、債券価格は額面より高い。
- D 実効利回りは、利子の再投資利率に関して投資家の予想を反映したものを使用した、債券を満期まで所有し続けた場合の平均複利最終利回りである。

解答：B

第6問 (40点)

III ポートフォリオ・マネジメントに関する次の文章を読み、以下の問1から問5の各問に対する答えとして最も適切なものをA～Eの中から1つ選んで、答案用紙の該当箇所をマークしなさい。

図表1 ファンドおよび市場インデックスのデータ

	期待リターン (%)	標準偏差 (%)	ベータ
ファンドA	9.2	22	問1
ファンドB	7.4	18	0.94
市場インデックス	6.5	15	1.00
安全資産	2.0	0	—

ベータは市場インデックスに対するもの。リターンの単位はすべて年率%。

問1 ファンドAと市場インデックスの相関係数を0.95とすると、ファンドAのベータはいくらになりますか。

- A 0.65
- B 0.95
- C 1.18
- D 1.24
- E 1.39

解答：E